石狩浜海水浴場におけるバリアフリービーチ整備について

Create to a Barrier-Free Beach in ISIKARIHAMA

（株）アルファ水工コンサルタンツ　○正　員　風間　隆宏(Takahiro Kazama)
北海道ライフセービングクラブ　森井　秀明(Hideaki Morii)
北海道ライフセービングクラブ　佐藤　詩子(Utako Sato)
石狩市役所商工労働観光課　板谷　英郁(Hidefumi Itaya)

1．はじめに

近年，生活水準の向上，余暇時間の増大，国民意識の変化に伴い，レクリエーション需要が増加している．中でも最近のアウトドア志向により，海岸を利用した海洋性レクリエーションが注目されている[1]．

平成12年4月に，防災のみを目的とした「海岸法」が改正施行され，海岸の環境保全や利用の促進と言った観点が付け加えられた[2]．この改正は今後，国の政策として，海岸を開放的で，誰もが憩い，利用できる身近な存在とする方向性を示している．

海洋性レクリエーションの中で最も多くの人が参加する活動は「海水浴」である．平成5年の調査では全国に1,409カ所の海水浴場が存在し，年間6,019万人が参加している．従来，海水浴は20～30歳代の参加率が高く，海水浴場施設もそれらを対象としたものが多い．井上ら(2000)は高齢者へのアンケート調査を行い，高齢者は海水浴には強い関心を抱いているが，現状の施設には満足していないと報告している[3]．今後，海岸を開放的で，誰もが憩い，利用できる身近な存在とする為には，高齢者，障害者への配慮は欠かせない．特に最も広く浸透した海洋性レクリエーション活動である海水浴に関する施設のバリアフリー化が不可欠である．しかしながら，我が国における海岸のバリアフリー化は，茨城県大洗町の大洗サンビーチなどで積極的に行われているが[4]，北海道内をはじめ全国的にはほとんど進んでいないのが現状である．

平成13年度から北海道石狩市にある石狩浜海水浴場では，3台の水陸両用車椅子（ランディーズ）（写真-1）の導入，車椅子及び高齢者専用の更衣室，シャワー室，トイレの整備を行い（写真-2）バリアフリービーチ化の一歩を踏み出した．しかし，まだ初年度と言うこともあり試行錯誤の状態である．

そこで，本論文では，今後のバリアフリービーチの整備方法を調査すること目的として，平成13年度の石狩浜海水浴場での試みの紹介，その問題点，今後の課題について報告を行う．

2．石狩浜海水浴場について

石狩浜海水浴場（通称：あそびーち石狩）は北海道石狩市に位置し，札幌市内から車で約30分の距離にある．石狩浜海水浴場は小樽市の銭函大浜から厚田村の無煙浜まで延長約30kmにわたって連なる石狩砂丘の一部で，海水浴場延長は約800m，海浜面積は30,000m²，遊泳面積は15,000m²である．その開設期間は7/7～8/20の45日間，遊泳時間は8:00～17:00である．海水浴場開設者は石狩市で，運営管理を（社）石狩観光協会が行っている．海水浴場施設として常設トイレ4ヵ所，仮設トイレ18ヵ所，炊事場2ヵ所，駐車場（3,500台収容），また民営の施設として海の家（シャワー，売店，更衣室，休憩所）が12カ所ある．札幌近郊と言うこともあり，2001年度は442,000人の遊泳客が訪れ，道内で最も遊泳客数の多い海水浴場である．近隣には石狩浜海浜植物保護センター，番屋の湯，番屋の宿，ハマナスの丘公園等の観光施設も充実している．

石狩浜海水浴場では安全管理にも力を入れている．2000年度からは従来の日本水難救済会石狩救難所に加え，北海道

写真-1　水陸両用車椅子

写真-2　シャワー室・更衣室・トイレ

ライフセービングクラブが監視活動を行っており，石狩消防署などとも協力して救護体制を整えている．北海道ライフセービングクラブでは，救助機材として，レスキューボード，レスキューチューブの導入を行い，開設期間中に延べ338人のライフセーバーが監視活動に従事した．

3．石狩浜海水浴場バリアフリー化の試み

石狩浜海水浴場のバリアフリー化は石狩市と北海道ライフセービングクラブの発案により検討が行われ，本年度は3台の水陸両用車椅子の導入，車椅子及び高齢者専用の更衣室，シャワー室，トイレの整備を行った．

水陸両用車椅子の運用方法としては（社）石狩観光協会に事前に連絡をしていただき，当日海水浴場事務所において貸し出しを行い，その後，北海道ライフセービングクラブ及び日本水難救済会らのメンバーが付き添い，監視を行った．海水浴開設期間に延べ200人弱の利用者が訪れた．利用者は福祉施設，障害者施設などの団体（10名～60名）での利用が多く，個人での利用は少数であった．

今後の運用方法の参考にするため，利用した6団体にアンケートを行った．その結果を以下に示す．

- 石狩浜海水浴場に水陸両用車椅子がある事を知ったきっかけについては，3団体が新聞，2団体がテレビであった．
- 水陸両用車椅子が無かった時の海の過ごし方については，「普通の車椅子を使用していた」，「介助者が抱いて海に来ていた」などの回答であった．また「海には行きづらいかった」との回答もあった．
- トイレ，シャワー室，更衣室の使用については，広く，綺麗であると概ね好評であったが，設置場所が1箇所しかないこと，案内版が出ていないこと，手すりの位置が低いなどの不満点も出された．
- 北海道ライフセービングクラブ及び日本水難救済会らのメンバーの対応については，「良くしてくれた」など概ね好評であったが，「メンバー内で対応の統一化が図れていない」との指摘もあった．
- その他の意見としては，「汀線まで容易に近づけるようにベニア板による道を作ってあったのが良かった」，「水陸両用車椅子の利用に際し通常の車椅子を保管する場所が無い」，「雪道などでも使用したい」などの回答があった．

4．問題点および今後の課題

石狩浜海水浴場における現状での問題点及び今後の課題を列記する．

◇ハード面

- 案内版が無い，手すりの位置が悪いなどの意見が寄せられた．今後は案内版の設置，手すり位置の工夫などより利用者が利用しやすい整備を推進する必要がある．
- 団体が利用する際3台の水陸両用車椅子では少ない場合が見られた．今後はニーズに応じて台数の増加も検討する必要がある．
- 水陸両用車椅子の利用に際し，通常の車椅子を保管する場所が無いとの意見が寄せられた．今後はソフト面の強化も含め，保管場所の確保などの対応策を検討する必要がある．
- 石狩浜海水浴場の場合，利用者の大多数が車で訪れている．駐車場から海水浴場までのアクセスは全ての人々に対応していない．今後，海水浴場内のみならず，駐車場からのアクセス等にも配慮する必要がある．

◇ソフト面

- 団体利用者に比べ個人利用者が少なかった．その要因の一つに広報不足が考えられる．今後HP，市広報，新聞等のマスコミを通じて情報提供を行う必要がある．
- サポートメンバーの対応の統一化が図れていなかった．今後，福祉団体等とも協力し，どの様なサポートが必要かなどサポートマニュアルの整備を行い，緊急時の対応，メンバーの意志統一などソフト面の強化が必要である．
- 石狩海水浴場周辺には様々な観光施設が整備されている．一部バリアフリー化している施設もあり，それらとの連携強化を図っていく必要がある．

5．結語

本論文では石狩浜海水浴場を例に，バリアフリービーチ化への試み，問題点及び今後の課題について整理を行った．試みでは，水陸両用車椅子の導入等により従来海に親しみ難かった人々にも，海水浴場が利用しやすい環境になった事を明らかにした．またハード・ソフト面から問題点を抽出し，今後の課題を明らかにした．

海岸法改正に伴い今後，海岸の利用に関するニーズは格段に高まると考えられる．その一手法として海水浴場のバリアフリー化は比較的低予算で導入できる対策ではないであろうか．今後，石狩浜海水浴場に留まらず，多くの海水浴場で導入される事が望まれる．またバリアフリー化はハードの整備面もさることながらソフト面の対策が重要である．様々な団体と協力しながら，全ての人々が海を楽しめる「なぎさづくり」を行っていくべきであろう．

最後に本論文を作成するのあたり多くの助言を戴いた愛知ライフセービングクラブの柴田涼子氏，志村英郎氏．またアンケートに快く回答して戴いた利用者の皆様，業務の傍らアンケートを採って戴いた斉藤伸子氏を始めとする北海道ライフセービングのメンバーに深甚なる感謝の意を表します．

参考文献

1）運輸省運輸政策局海洋・環境課編：海洋性レクリエーションの現状と展望，（財）日本海事広報協会，pp.106，1992
2）建設省河川局防災・海岸課海岸室監修：海岸ハンドブック，全国海岸協会，pp.280，1999
3）井上雅夫，中川良平，吉村隆生，端谷研治：高齢者の海岸利用，特に海水浴場に関する意識調査，海岸工学論文集，No. 47，pp.1301-1305，2000
4）高橋正彦：大洗サンビーチにおけるバリアフリー・ビーチの試み，テクノオーシャン'98論文集，pp.81-84，1998